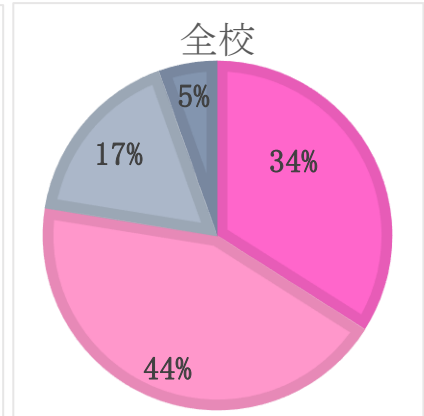
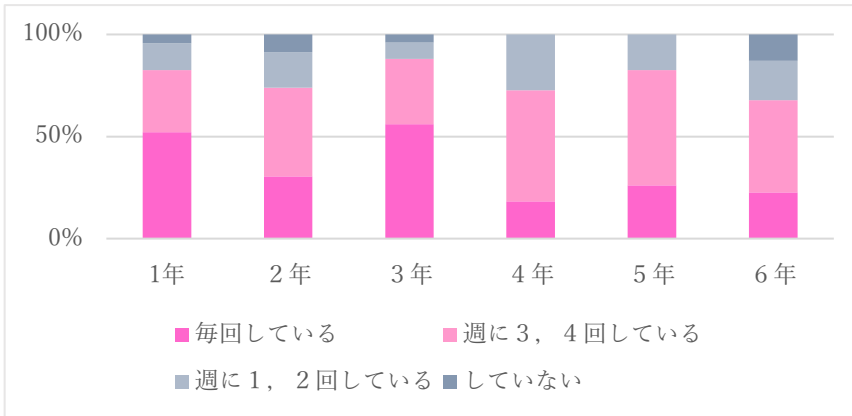


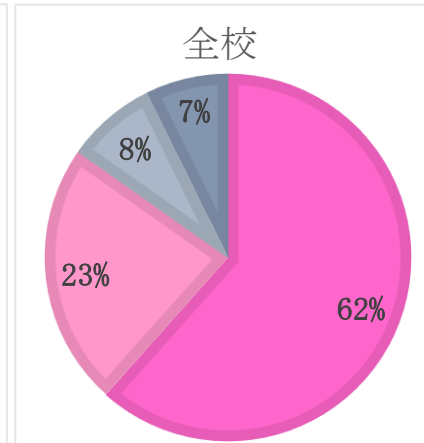
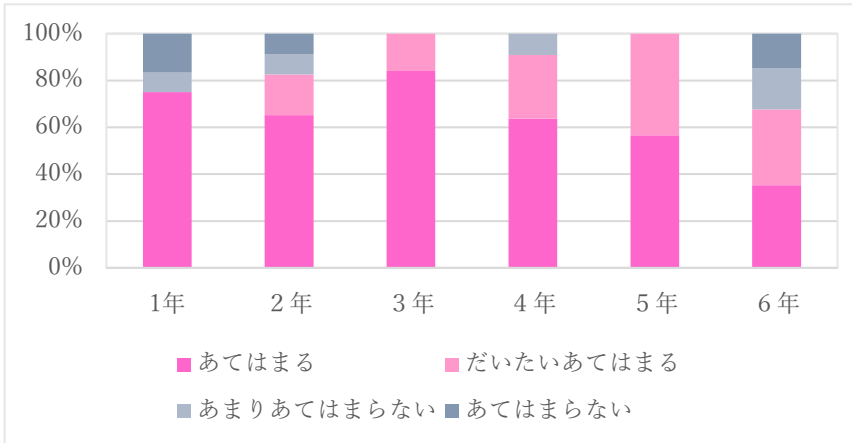
Ⅲ 研究のまとめ

1 算数アンケートの結果

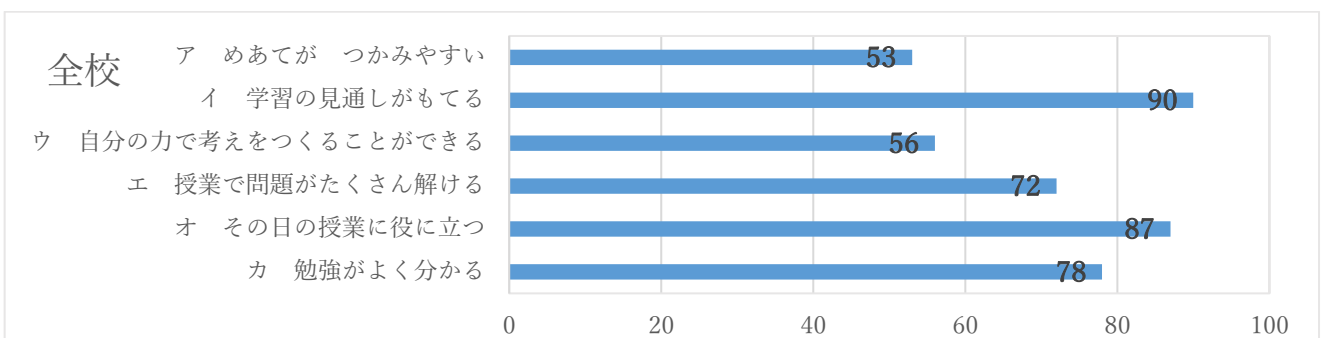
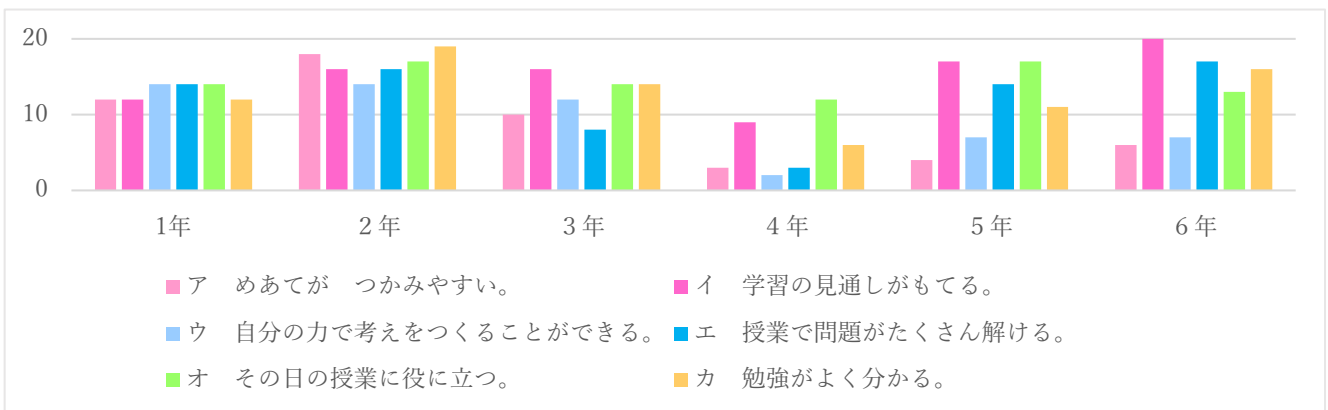
① 算数チャレンジをしていますか



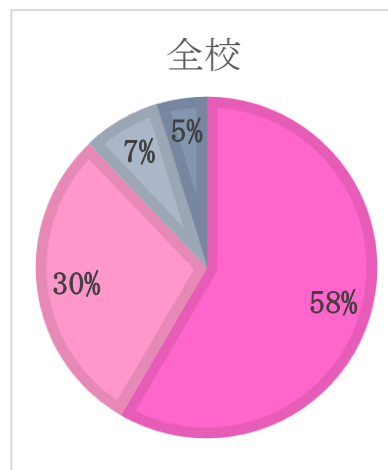
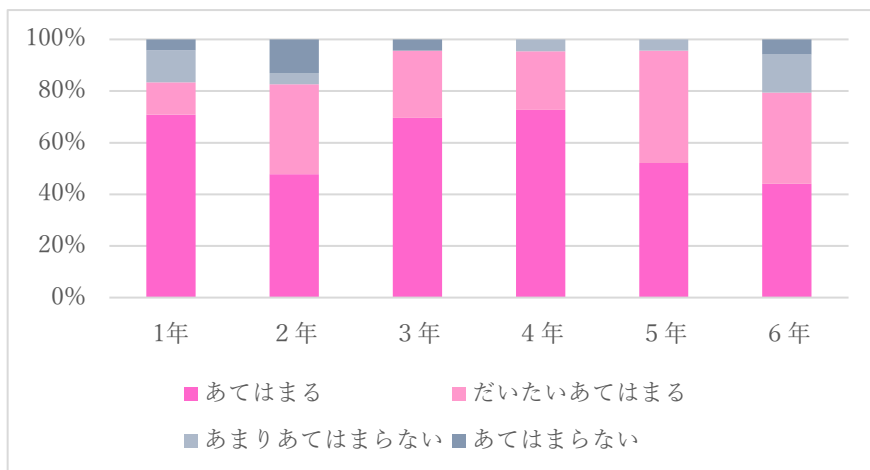
② 算数チャレンジは役に立っていると思いますか。



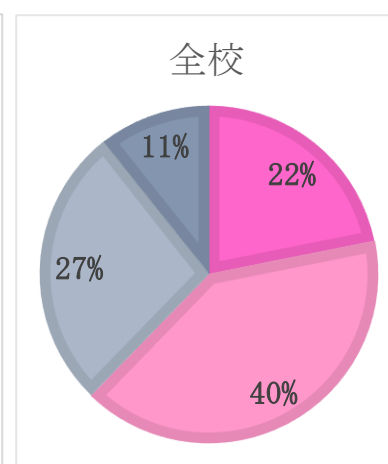
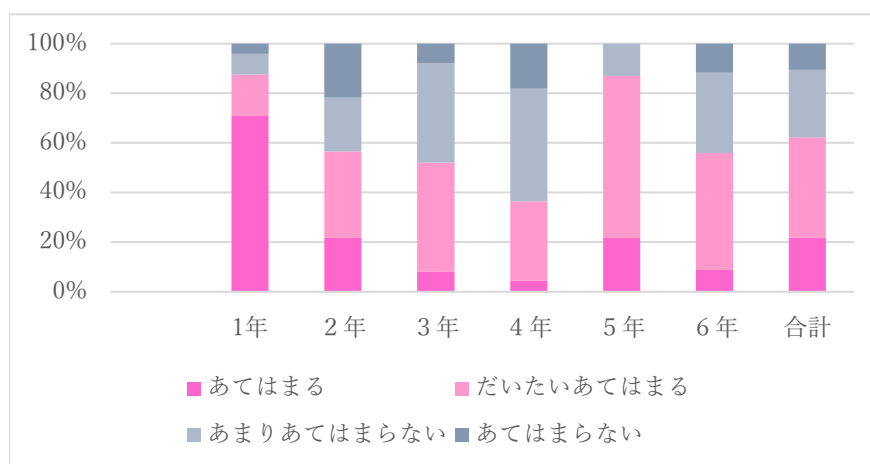
③ 算数チャレンジのいいところはどこですか。(複数選択可)



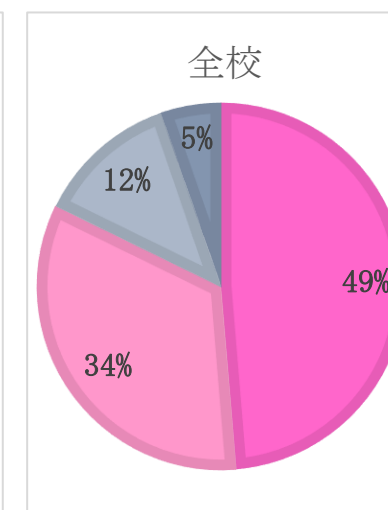
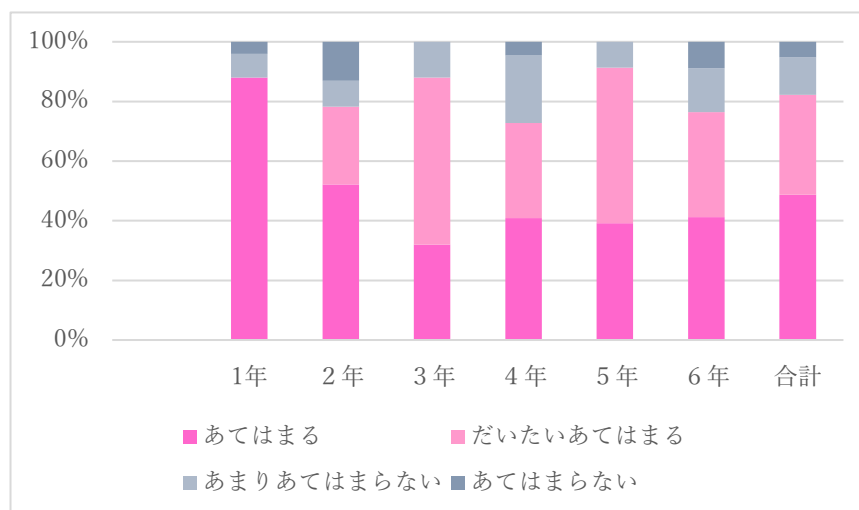
④ 授業の内容はよく分かりますか。



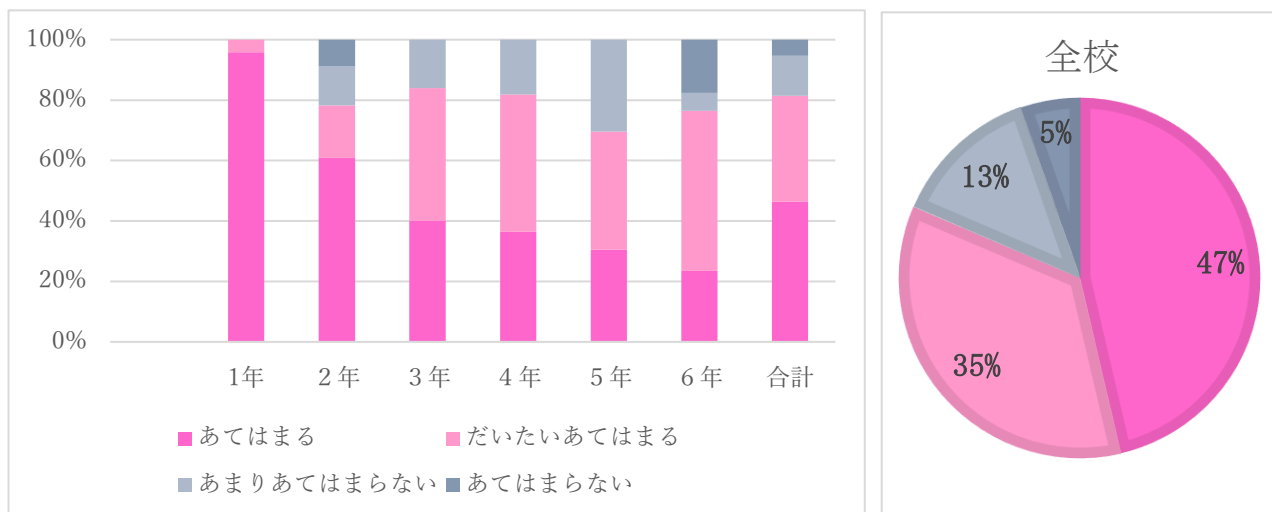
⑤ 自分の考えを理由を言いながら友達に説明することができますか



⑥ 友達の発表と自分の考えを比べて、よりよい考えを見つけようとしていますか。



⑦ めあてや大切な言葉をもとに学習のまとめを考えることができますか。



2 成果と課題

本年度、「主体的に学び、進んで表現する児童の育成～算数科における「算数チャレンジ」を生かした学習指導を通して～」を研究主題に校内研究を行ってきた。以下は各学年の算数チャレンジの取り組みで明らかになった成果と課題をもとに、学校全体の課題と成果をまとめた。

(1) 成果

キーワード：見通し、自信、抵抗感の軽減、学習意欲の向上、導入部分の時間短縮、テンポ、全体交流や習熟の時間確保、学びの自己調整力、予習的学習の他教科への広がり

- 算数チャレンジは、家庭での取り組むため、児童は自分のペースで題意の把握や理解を行うことができた。児童はその日の学習に対する見通しが立っているため、学習や問題に対する自信をもって授業に臨むことができたり、授業に対する抵抗感が少なくなったりした。
- 教師は授業において、題意の把握や課題の設定などを行う導入部分の時間短縮ができ、テンポ良く授業を進めることができ、自力解決後の一対一での交流や全体交流、習熟の時間を多く確保できるようになった。また、算数チャレンジの理解の状況を教師が把握することでそれを生かした授業が展開できた。
- 高学年においては、授業の中で理解度をチェックすることで、分からなかったことが分かるようになり、分かったと思っていたことがさらに説明までできるようになったりというように、理解度の上昇した児童の学習意欲に向上が見られた。また、自身の理解度を把握して授業に臨むことにより、個人で設定した目標に向かい学習を進めることができた。さらには、他教科（国語科、社会科、体育科など）においても予習的学習に取り組む姿が見られるようになった。

(2) 課題

キーワード：取り組みの個人差、取り組む良さの実感、理解度の規準、交流活動の充実、習熟の方法

- ・多くの児童が算数チャレンジに取り組んでいる一方、一部の児童は取り組めていない。また、取り組んでいる児童も問題を読むだけの児童、教科書への書き込みを行う児童、自主学習ノートにまとめる児童とその取り組みには個人差がある。個々に目を向けると、年間を通して、取り組み方に変化がない児童が多く、取り組みの段階を上げるのが難しい。また、低学年の児童には、算数チャレンジをする良さを実感できることは難しい。このような課題を解決するために児童に算数チャレンジをすることの目的や良さを伝えることを教師が年間を通して意識し続けることが大切であると考え。各学年の発達段階や個の取り組み状況について考慮しながら、指導や支援の方法を考える必要がある。また、算数チャレンジは家庭での取り組みが主であるため、家庭での協力を促すことが大切である。今年度、算数チャレンジに取り組んだ成果をもとに「算数チャレンジ」の取り組み方法や目的、その効果などを学級懇談会や通信等で保護者に発信していきたい。
- ・理解度チェックを行っているが、その規準が明確でない。そのため、理解度チェックをする場合の規準を確認しておく必要がある。
- ・算数チャレンジに取り組んでいる児童とそうでない児童の差をいかに埋めていくかが課題である。また、算数チャレンジで概ね理解できた児童は、授業の進度が遅いと感じているようだった。そのため、理解できた児童に説明をさせたり、理解できていない児童のサポートをさせたりすることも、段階的に考えていく必要がある。
- ・時間的な余裕が生まれたが、十分に交流活動を取り入れることができていない。また、学級によっては個別の支援が必要な児童の割合が多く、児童同士の学び合いをうまく取り入れることができていない。そのため、各学年の発達段階を考慮した、児童同士の交流活動の方法を模索する必要がある。
- ・習熟度に合わせた問題の準備が十分ではない。多くの学級で教科書の適用問題→巻末の「もっと練習」→ドリル→タブレットによる習熟を一連の流れとしているが、それぞれの児童の習熟状況に合わせた問題を考えるのが難しい。また、習熟でタブレットの活用をしたいが、適切なアプリがなかなか見つからないという課題がある。そのため、習熟度に応じた適応問題をどのようにして準備するのか検討する必要がある。
- ・算数アンケートの結果から、多くの児童が授業の内容を理解できていると評価していたが、単元テストや学習状況調査の結果には反映されておらず、特に思考・判断・表現に関する問題には課題を残している。今年度、児童は算数チャレンジが軌道に乗ってきたので、学力向上につながるような授業改善を行うことが今後の課題である。